

秋田県埋蔵文化財センター年報

5

昭和61年度

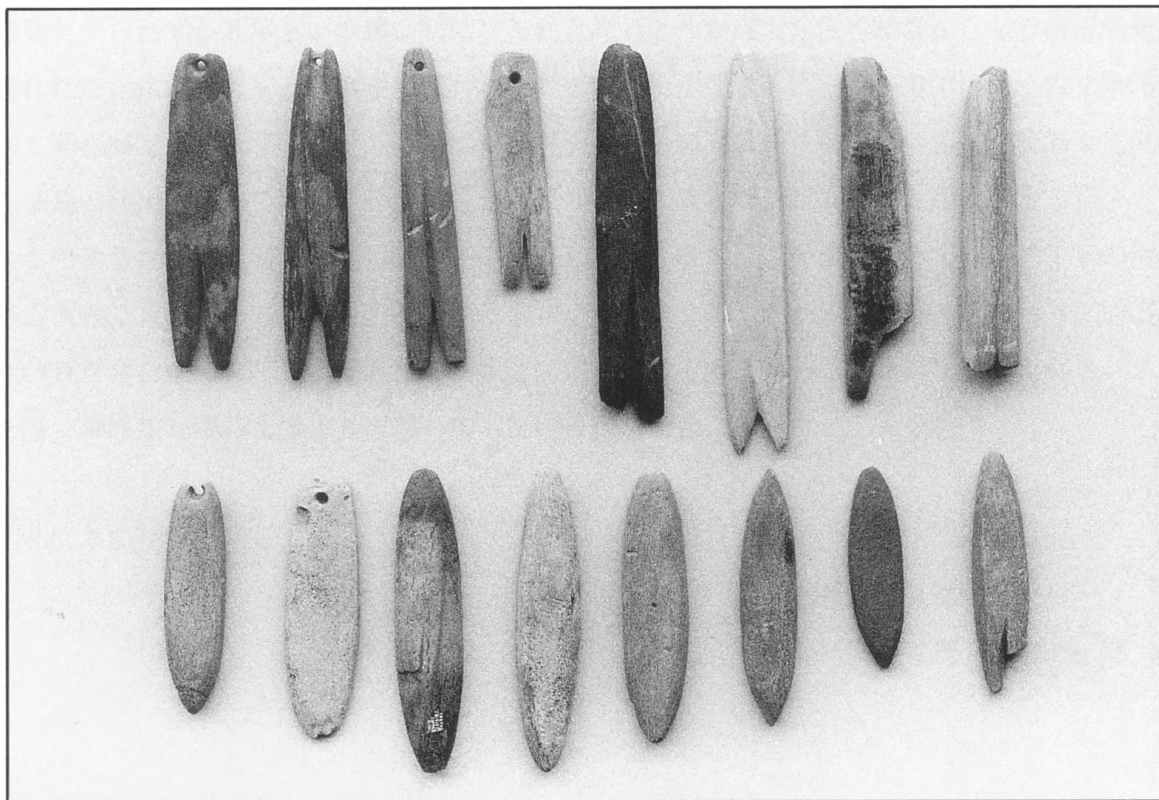
1987・3

秋田県埋蔵文化財センター

＝昭和61年度発掘調査遺跡の出土遺物から＝



寒川Ⅱ遺跡出土の後北C₂式土器



上ノ山Ⅱ遺跡出土の石器

昭和61年度発掘調査遺跡の出土遺物から

寒川Ⅱ遺跡出土後北C₂式土器

6基検出された土壌墓の内の1基から副葬品として埋納された状態で出土しました。本来、北海道の続縄文文化を代表する土器の一種ですが、本州で遺構内から発見された例としてはきわめて貴重な土器です。

上ノ山Ⅱ遺跡出土の石器

今回の調査で従来あまり知られることの少なかった2種類の石器がみつかりました。上下段の石器とも類例の少ない珍しいものです。縄文時代前期の大木式土器文化に属する石器と思われます。

序

当埋蔵文化財センターが日常の業務としている埋蔵文化財の発掘調査は、毎年間断なく新資料を提示しております。これは地域に根差した歴史の掘り起こしであり、それによって得られた資料は考古学の俎上に載せられて歴史の中に組み込まれてゆきます。こうした資料の追加を重ね続けてゆくことは、一步一步地を踏み締めて進むようなものとも言えましょう。さらにそうした作業に立脚する考古学においても、その本質には地歩を固めながら進展するような特質があるように見受けられます。

しかし、時としてただひとつの資料の発見が、斯学に旧来なかった新しい視点を切り開き、長足の推進をもたらすことも有り得るのではないかと考えます。昭和61年度に実施された埋蔵文化財の発掘調査では、まさにそうした意味での多くの貴重な資料を得ることができました。

鹿角市にある堪忍沢遺跡の調査では13基もの平安時代の製鉄炉が検出されました。鹿角市は県内でも発掘調査による遺跡の解明の進んでいる地域ですが、現在まで調査された遺跡の大半は農具や武具が用いられたころの平安時代の集落跡であります。こうした出土製品の材料となった鉄の生産地の所在が確かめられたことは、この地域での古代史上の大きな課題の一つを解き明かしたものと評価できます。また協和町の上ノ山Ⅱ遺跡では、縄文時代前期の大型住居跡群からなる集落跡が調査されております。国の史跡指定をうけた能代市杉沢台遺跡の大型住居跡の発見からわずか6年という短い間に、これと同じような巨大な住居跡群からなる集落が発見されたことは驚嘆にも近い事実であり、その豊富な出土遺物に県内ばかりではなく広く県外からも関心が寄せられました。さらに能代市寒川遺跡の縄文時代早期末の住居跡、続縄文文化の土壙墓の検出と極めて稀にしか調査されることのない貴重な遺跡の報告が相次ぎました。

このような今年度実施の発掘調査で得られた数々の成果は、今後、考古学、古代史学の世界にも大きく貢献するであろうと確信されます。そして、こうした成果が日々行なわれている発掘調査を含む埋蔵文化財の保護活動によって得られるものであることを御理解いただき、より一層の御厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

昭和62年3月31日

秋田県埋蔵文化財センター

所長 齊藤養治郎

例 言

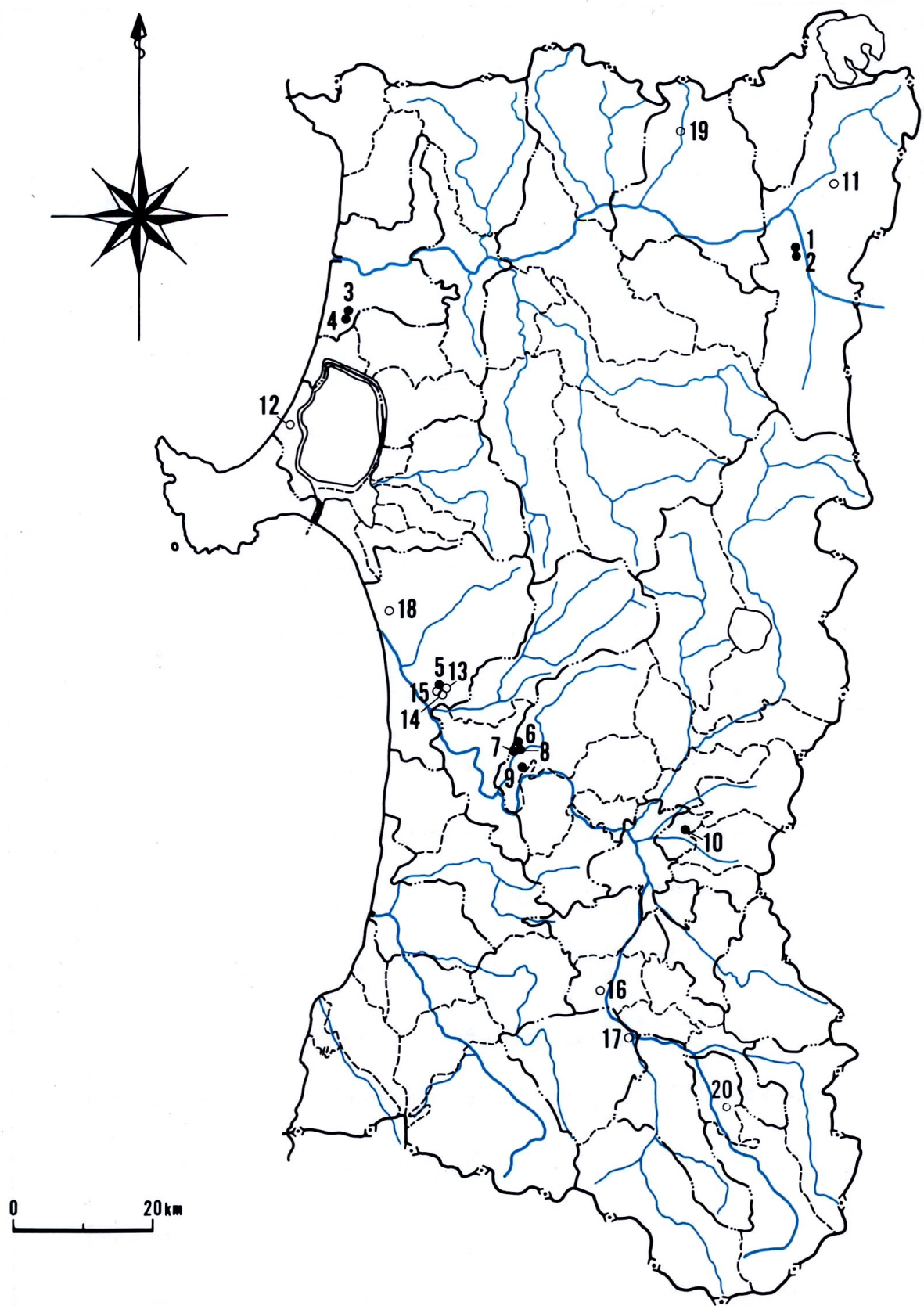
1. 本書は昭和61年度における秋田県埋蔵文化財センターの事業内容をまとめたものである。
2. 本書の編集は研究部が行った。

目 次

序.....	1
例言、目次.....	2
1. 県内調査遺跡一覧.....	3
2. 各遺跡の調査概要.....	4
3. 遺構の切り取り保存について(保存部).....	15
4. 研修事業.....	19
(1) 昭和61年度秋田県埋蔵文化財センター研修会	19
(2) 東北横断自動車道上ノ山II遺跡現地説明会	21
(3) 昭和61年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会	21
秋田県埋蔵文化財センター職員録.....	22

1. 県内調査遺跡一覧

番号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	発掘面積	時 代	原 因	調 査 主 体	摘 要
1	堪忍沢遺跡	鹿角市	昭和61年5月6日 ～7月25日	1,200m ²	平安時代	西山地区農免農道整備事業	秋田県教育委員会	
2	高瀬館遺跡	鹿角市	昭和61年7月1日 ～8月2日	830m ²	中 世	西山地区農免農道整備事業	"	
3	寒川Ⅰ遺跡	能代市	昭和61年8月18日 ～12月5日	3,000m ²	縄文時代	国道7号 八竜能代道路建設事業	"	
4	寒川Ⅱ遺跡	能代市	昭和61年8月18日 ～12月5日	3,900m ²	続縄文文化	国道7号 八竜能代道路建設事業	"	
5	大杉沢遺跡	秋田市	昭和61年4月30日 ～7月3日	2,800m ²	縄文時代	国道13号 横山バイパス建設事業	"	
6	上ノ山Ⅰ遺跡	協和町	昭和61年6月16日 ～9月13日	4,100m ²	縄文時代	東北横断自動車道建設事業	"	
7	上ノ山Ⅱ遺跡	協和町	昭和61年6月16日 ～12月9日	24,300m ²	縄文時代	東北横断自動車道建設事業	"	
8	館野Ⅰ遺跡	協和町	昭和61年9月12日 ～12月9日	4,900m ²	縄文時代	東北横断自動車道建設事業	"	
9	半仙遺跡	協和町	昭和61年9月20日 ～11月19日	2,300m ²	縄文時代	東北横断自動車道建設事業	"	
10	弘田柵跡	仙北町 千畑町	昭和61年4月1日 ～12月13日	1,300m ²	平安時代	弘田柵跡学術調査	"	
11	大湯環状列石周辺	鹿角市	昭和61年5月8日 ～9月8日	1,972m ²	縄文時代	環境整備	鹿角市教育委員会	
12	西中海老沢遺跡	若美町	昭和61年6月6日 ～6月28日	250m ²	平安時代	農道拡幅	若美町教育委員会	
13	地方遺跡	秋田市	昭和61年4月24日 ～12月9日	11,500m ²	縄文時代	新都市開発	秋田市教育委員会	
14	下堤C遺跡	秋田市	昭和61年10月3日 ～12月9日	7,000m ²	平安時代	新都市開発	"	昭和60年 ～62年の 継続調査
15	台B遺跡	秋田市	昭和61年4月24日 ～6月5日	1,150m ²	縄文時代	新都市開発	"	
16	根羽子沢遺跡	雄物川町	昭和61年8月25日 ～9月30日	592m ²	縄文時代	畑地整備	雄物川町教育委員会	
17	大久保遺跡 (柏原古墳群)	羽後町	昭和61年5月2日 ～9月8日	1,643m ²	縄文時代 奈良時代	範囲確認	羽後町教育委員会	
18	秋田城跡	秋田市	昭和61年4月8日 ～9月30日	1,791m ²	奈良時代 平安時代	秋田城跡学術調査	秋田市教育委員会	
19	矢立廃寺	大館市	昭和61年6月2日 ～7月1日	610m ²	中 世	史跡公園整備	大館市教育委員会	
20	稲庭城跡	稲川町	昭和61年8月8日 ～10月10日	1,100m ²	中世～近世	資料館建設	稲川町教育委員会	



昭和61年度県内調査遺跡位置図
 (※番号は一覧表番号と対応、●県、○市町村)

2. 各遺跡の調査概要

かん 忍 沢 遺 跡

事業名	西山地区農免農道整備事業	所在地	鹿角市花輪字堪忍沢109
調査期間	昭和61年5月6日～7月25日	事業関係機関	鹿角農林事務所
調査面積	1,200m ²	担当者	熊谷太郎・小林 克

立地・検出遺構と遺物

米代川左岸の西山地区の段丘、山地は幾つかの沢が奥深くまで入り込んでおり、自然地形を利用した中世城館が多く立地している。堪忍沢遺跡はこの西山地区にあり、国鉄陸中花輪駅の北西約800mの地点にある。今回、調査の対象となったのは、堪忍沢遺跡の台地平坦部とその北側に連続する山麓の斜面部分である。遺跡付近での標高は180～190mある。

調査の結果、竪穴住居跡6軒、製鉄炉13基、土壙8基、溝1条が検出された。これらの遺構は主に平安時代に営まれたことが遺物から判明した。

製鉄炉は斜面上に2～3基づつが並列して検出されている。炉の構築にあたっては、斜面を階段状に削って平らな作業面を作り、その内部に炉を設けている。各炉は炉壁の状態、炉底の状態から最低2回の操業が行なわれたと判断される。

調査区のうち、斜面部分を除く台地平坦部は、その基盤層が鳥越火山灰層と呼ばれるシラス層によって形成されている。遺跡の近くには、この鳥越火山灰層の露頭があり、シラス層下に形成されている砂礫層中には厚さ10cmほどの砂鉄層を観

察することができる。堪忍沢遺跡の製鉄もこの砂鉄を原料として行なわれていたものと考えられる。

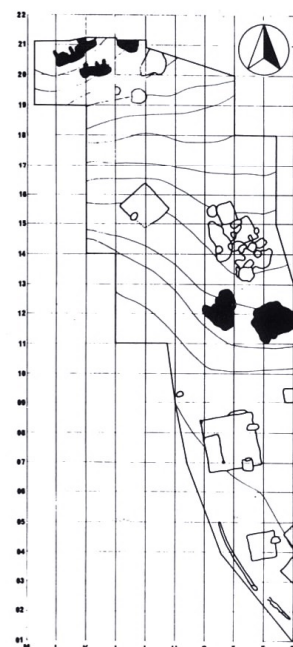
製鉄炉の内部、および前庭部分の作業面からは多量の鉄滓、フイゴ羽口が採集された。また、台地平坦部にある住居跡からは、平安時代の土師器に加えて鉄製の紡錘車や鍬、刀子なども出土している。SI04とした住居跡では、住居内からスサ入りの粘土による炉壁片が確認され、鍛冶を行った可能性がある。



3基並列した製鉄炉



堪忍沢遺跡全景



黒く塗った部分が製鉄炉のある箇所

縮尺
0.085 %
(1 : 1176)

堪忍沢遺跡遺構配置図

事業名	西山地区農免農道整備事業	所在地	鹿角市花輪字小森沢119
調査期間	昭和61年7月1日～8月2日	事業関係機関	鹿角農林事務所
調査面積	830m ²	担当者	小林 克・熊谷太郎

立地・検出遺構と遺物

米代川左岸、西山地区の段丘上に位置する高瀬館遺跡は、国鉄陸中花輪駅北西1.8kmの地点にある。この遺跡は、浦館、熊館、前館と呼ばれる3館からなり、さらに各館が幾つかの郭によって構成される多郭連続式の中世城館跡である。今回、調査の対象となったのは、3館のうち、中央部に位置する熊館の第I郭の南端部と、その北側の段築部分である。

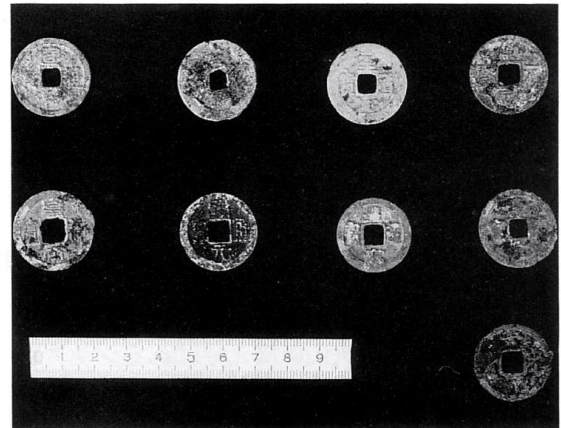
第I郭上面からは、方形堅穴状遺構10基、方形土塋9基、円形土塋5基、溝1条を、段築部分からは地山を削り出して作った土塁と、溝1条を検出した。

方形堅穴状遺構は、郭上面の縁近くに構築されている。一部の例は、第I郭をつくる際、すなわち、台地が削り出された際に一緒に削られている。したがって、第I郭そのものよりも古い時期のものもある。形態上は、約3m四方の略正方形を示すものと、約3.8m×3mの長方形で一辺に張り出し部をもつものがある。

段築部分に検出された土塁は鹿角地方の中世城館跡では既に乳牛平遺跡の場合に、削り出しただけのものと、削り出した地山を芯とし土を盛り上げたものがあるが、高瀬館跡の土塁は前者に相

当する。また、この土塁を削り出した際にできた空堀の底に1条の溝が確認された。土塁とともに柵列があった可能性もあるが、遺材の確認はなく詳細をあきらかにすることはできなかった。

出土した遺物は極めて少ない。方形堅穴状遺構から石鉢、青磁片、炭化材や炭化米が出土している。また、墓墳と考えられる遺構からは「皇宋元宝」「大宋元宝」「至道元宝」などの北宋銭や、刀子の柄金具が出土している。



土坑内出土の宋銭



高瀬館遺跡遺構配置図



遺跡・周辺地形図
(I、IIは郭面)

さむ かわ
寒 川 I 遺 跡

事業名	一般国道7号八竜能代道路建設事業	所在地	能代市浅内字十二林6
調査期間	昭和61年8月18日～12月5日	事業関係機関	建設省東北建設局能代工事事務所
調査面積	3,000m ²	担当者	利部 修・三嶋隆儀・小林 克

立地・検出された遺構と遺物

寒川 I 遺跡は米代川河口南東から八竜町まで続く標高20～40mの海岸段丘上、国鉄能代駅の南約6kmの地点にある。寒川遺跡としては昭和52年度刊行の秋田県遺跡地図にのる周知の遺跡である。昭和57年度に実施された国営能代開拓建設事業に先立つ遺跡範囲確認調査で、寒川付近には3箇所の地点が残っていることがわかった。今回、調査が実施された寒川 I 遺跡は、この3地点のうち、A地点とされた箇所の南の舌状台地部分にあたる。調査区部分での標高は10～18mである。

寒川 I 遺跡の周辺の遺跡としては、北側に今年度並行して調査の実施された寒川 II 遺跡、また南側には、「鍛冶場」と通称される十二林遺跡が沢筋を隔てて位置している。さらにその南にも福田遺跡、頭無上遺跡、成合遺跡などがある。また、昭和58年、60年に発掘調査の実施された此掛沢 II 遺跡、上の山 II 遺跡は本遺跡の1.6km北東にある。

発掘調査にあたっては、舌状台地の上面の平坦部とその南北両側の斜面部分が調査区として設定された。

調査の結果、縄文時代早期の竪穴住居跡6軒、縄文時代中期竪穴住居跡5軒、縄文時代土坑27基、平安時代前期の竪穴住居跡1軒などが検出された。その他、縄文時代早期や、弥生時代前期の土器の捨て場が斜面上からみつまっている。

ことに、縄文時代早期の竪穴住居跡は、現在までのところ県内では最古の例である。その平面形態はSI37の例をとると、長径6m、短径4mの規模をもち、北東―南西の方向に長軸をもつ楕円形プランである。

縄文時代早期の土器は、後葉に位置付けられる赤御堂式が主体をなす。土器の表面、裏面ともに縄文が施文され、尖底となる。口縁部は、折り返し口縁となる例や粘土紐の貼り付けによる1～2条の隆帯がつく場合もある。さらにこれらの土器に混じって、胎土に繊維を含み土器の表面だけに0段多条の縄文原体によって羽状縄文の表された、赤御堂式に後続する土器、すなわち、長七谷地第Ⅲ群土器も若干量出土している。これらの土器に伴う石器としては、トランシェ様石器、篋状石器、小形の石錘などが出土している。



周辺地形と調査区
スクリーン・トーン部分が調査区



縄文時代早期の竪穴住居跡



縄文時代早期の土器

寒川 II 遺 跡

事業名	一般国道7号八竜能代道路建設事業	所在地	能代市浅内字寒川家の上48
調査期間	昭和61年8月18日～12月5日	事業関係機関	建設省東北建設局能代工事事務所
調査面積	3,900m ²	担当者	小林 克・利部 修・三嶋隆儀

立地・検出された遺構と遺物

寒川II遺跡は昭和57年度実施の遺跡範囲確認調査でA地点とされた箇所のうち、その北側の台地平坦部と寒川II遺跡に面した斜面部分が相当する。台地の平坦部は現在畑地として利用されているが、斜面部分は灌木の茂る荒地である。調査区での標高は台地平坦部で24m程、斜面部分では17～23mである。

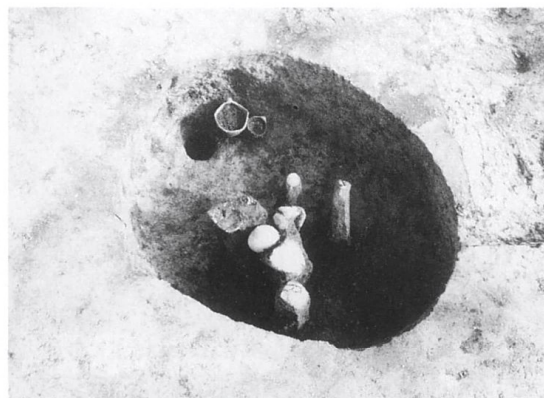
調査の結果、縄文時代前期末の時期を中心としたフラスコ状土坑13基、縄文時代中期後半の竪穴住居跡2軒、続縄文文化後期の土壇墓6基、平安時代後期の竪穴住居跡14軒、同期の製鉄炉1基、および炭窯3基などが検出された。

縄文時代前期末のフラスコ状土坑の中からは、円筒下層d式土器に混じって竹管文を主な文様とする北陸系の土器も出土している。また縄文時代中期の竪穴住居跡の床面には、大木9式土器と考えられる土器が埋設されて、炉として使用されている。

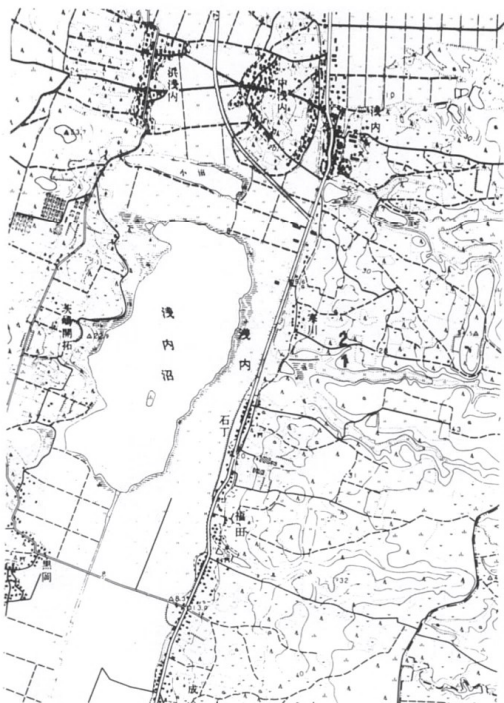
続縄文文化後期の土壇墓は、台地平坦部の調査区でみつかった。6基の土壇墓は、いずれも楕円形を呈し、その規模は長径127～202cm、短径90～160cmの範囲にある。長軸方向はN-79°-EかN-68°-Wの範囲にあり、およそ東西方向に長軸をもつとよ。また、各土壇墓とも長軸の両端に一对の柱穴様のピットをもつ。遺物の出土した土壇墓(副葬品が埋納された土壇墓)5基は、すべて土壇墓内の東の端から完形もしくは完形に近い土器を出土している。これらの土器

は、北海道系の後北C₂式土器と在地の小坂X式土器である。また土器の他に、板状の鉄斧、刀子の柄部分などの副葬品が出土している。

平安時代後期の住居跡は、東側の壁にカマドをもつ。斜面上に位置するものは南側の壁が検出されなかったものの、カマド部分が遺存していたため、多量の土器類を出土している。これらの土器(土師器坏、甕)は、上の山II遺跡の土器類と類似し、10世紀後半から11世紀の年代を与えることができる。



7 個の完形土器を出土した土壇墓



遺跡の位置図(縮尺五万分の一)

1:寒川I、2:寒川II



周辺地形と調査区

スクリーン・トーン部分が調査区

おお すぎ さわ
大 杉 沢 遺 跡

事業名	一般国道13号横山バイパス建設事業	所在地	秋田市四ツ小屋小阿地大杉沢61
調査期間	昭和61年4月30日～7月3日	事業関係機関	東北地方建設局秋田工事事務所
調査面積	2,800m ²	担当者	高橋忠彦・栗沢 光男

立地・検出された遺構と遺物

遺跡は国鉄四ツ小屋駅北東約1.6kmの地点、標高30～40mの末戸台と呼ばれる台地上にある。この末戸台は雄物川と岩見川の合流点の東に広がる広大な台地であり、大杉沢遺跡の他に、坂ノ上E遺跡、地藏田B遺跡、湯ノ沢F遺跡、地方遺跡など、御所野台地地区に計画された新都市建設に伴う発掘調査が行われた遺跡群が密に立地する。調査区は、この末戸台台地から西へ延びる舌状台地部分に設けられた。調査区部分での標高は、40m程ある。

遺跡の現況は畑地である。この畑地造成の際に現在耕作土の下に残る第II層の大部分が削除されたと思われ、遺構の多くもその上部を失い、部分的にしか残っていない。

調査の結果、縄文時代中期前半から平安時代にかけての土坑34基、縄文時代後期の土器埋設遺構3基、古代の住居跡1軒、時期不明の溝2条、時期不明の環状の溝状遺構3基などが検出された。

縄文時代中期前半の土坑では、その覆土中からまとまった量の土器が出土している。土坑は円形の平面プランをもち、その規模は直径50～80cm、深さ50cmほどある。

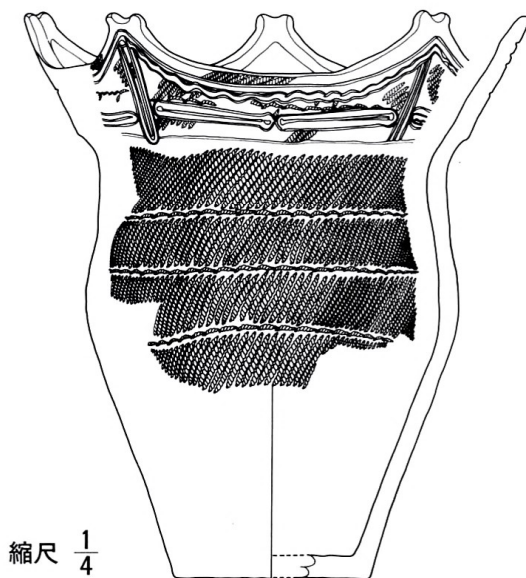
34基の土坑のうち最も多いのが縄文時代後期初

頭に属するものである。これらの土坑は調査区の東側に多く分布する。直径約50cm、深さ30～50cmの円形を呈するが、中には大形の袋状土坑も存在する。後期初頭の土器埋設遺構はその上部を失って、遺構の確認面からわずか3～5cm分しか残っていない。わずかの残存部分であるが、該期の深鉢形土器と判断できる。

古代の住居跡は、一辺2.6mの方形で、北側の壁にカマドをもつ。カマドの煙道部は短い。床面上からは炭化材が検出されている。平安時代の土坑は縄文時代後期初頭のそれに次いで多くみつまっている。SK47とした土坑では、長径1m、短径0.7mの楕円形の平面プランをもち、覆土中から土師器の他に鉄滓、焼土塊を多く出土している。

環状の溝状遺構は、調査区の西縁から検出された。ほぼ全体を現すことのできたSU18とした遺構では、直径10mの円を描いて幅1m、深さ0.5mの溝が巡っている。この溝の上面には人頭大の自然礫があり、またその底面には拳大の礫が敷き詰められた状態でみつまっている。いずれも花崗岩である。

また、遺構外から珠洲系陶器が出土している。本遺跡を含めて周辺の遺跡からもこの種の中世陶器が出土した例は初めてであり、貴重である。



縮尺 $\frac{1}{4}$

土坑内出土縄文土器



遺跡周辺地形図

スクリーン・トーン部分が調査区

う え や ま
上 ノ 山 I 遺 跡

事業名	東北横断自動車道建設事業	所在地	仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山64
調査期間	昭和61年6月16日～9月13日	事業関係機関	日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所
調査面積	4,100m ²	担当者	柴田陽一郎・熊谷太郎

立地・検出された遺構と遺物

今年度、東北横断自動車道秋田線にかかる遺跡として調査されたのは、協和町中淀川地内の協和インターチェンジ予定地にある上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、館野Ⅰ遺跡の3箇所の遺跡、および協和町峰吉川地内の半仙遺跡である。上ノ山Ⅰ遺跡のある協和インターチェンジ予定地は、国鉄羽後境駅の南西4kmの地点にある。

上ノ山Ⅰ、Ⅱ遺跡および館野Ⅰ遺跡は、淀川右岸の標高45～50mの台地上にある。これらの遺跡は淀川に面した館野段丘、西段丘と呼ばれる2つの河岸段丘が開析されてできた、上面幅150～200mの舌状台地上にそれぞれ立地している。上ノ山Ⅰ遺跡と館野Ⅰ遺跡は、淀川に向かって開く小さな沢をはさんで隣合う位置の館野段丘上にあり、その反対側、3つの遺跡がのる台地の北西縁の部分の館野段丘よりは1段高い西段丘上に上ノ山Ⅱ遺跡がある。

調査の結果、縄文時代前期後葉、中期後葉の各時期の住居跡3軒、縄文時代前期～中期および晩期の時期と推定される土坑24基などが検出された。

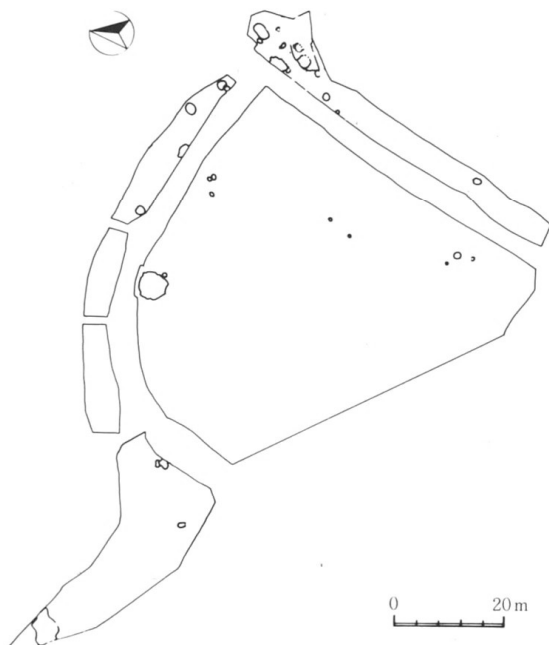
縄文時代各時期の住居跡のうち、中期後葉の住居跡は2～3期の建て替えがある。さらにこの時期には、石田炉、土器埋設遺構などの遺構もあり、これらは壁面を検出できなかったものの、住居跡である可能性も認められている。縄文時代前期～

中期に属する土坑は、その断面形がフラスコ状もしくは袋状を呈し、台地縁辺に構築されている。対して、晩期に属する土坑は、2～3基づつが台地縁辺よりやや中央寄りに位置して分布する傾向があり、土坑内部には河原石が入っている。

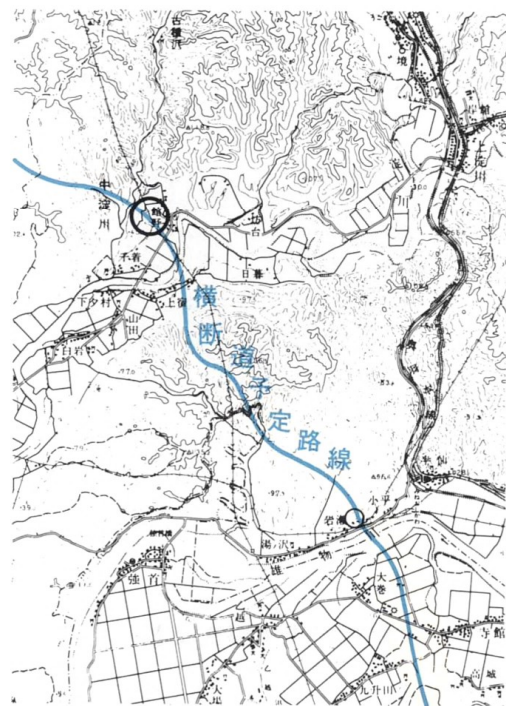
これらの遺構に伴って、各時期の土器、石器が出土している。石器の中には縄文時代前期～中期前葉にみられる半円状偏平打製石器も含まれている。



縄文時代中期の竪穴住居跡



上ノ山Ⅰ遺跡遺構分布図



東北横断自動車道関係の遺跡位置

○ 上ノ山Ⅰ，上ノ山Ⅱ，館野 ○ 半仙

うえ やま
上ノ山Ⅱ遺跡

事業名	東北横断自動車道建設事業	所在地	仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山1
調査期間	昭和61年6月16日～12月9日	事業関係機関	日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所
調査面積	24,300m ²	担当者	大野憲司・桜田隆・児玉準・高橋忠彦 栗沢光男・山崎文幸・高橋学

立地・検出された遺構と遺物

上ノ山Ⅱ遺跡は、館野Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅰ遺跡の西側に隣接する。上ノ山Ⅱ遺跡の位置する段丘は、館野、上ノ山Ⅰ両遺跡の立地する段丘よりも1段高く、双方の比高はおよそ5mである。

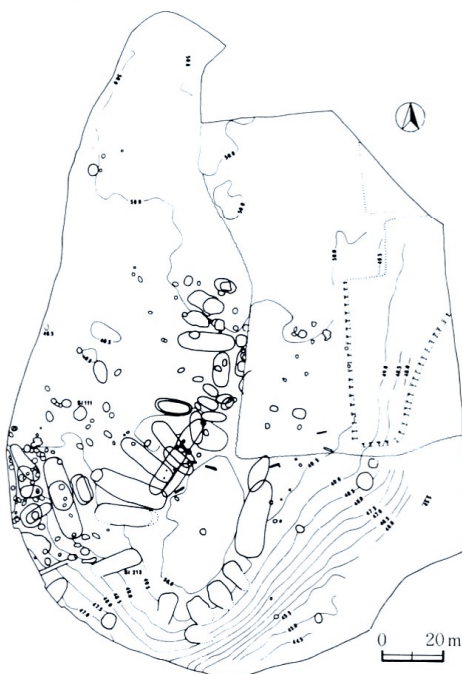
調査の結果、縄文時代前期後葉の竪穴住居跡64軒、同期の土坑137基、同じく土器埋設遺構6基などが検出され、この遺跡が該期の集落としては全国的に見ても有数の遺跡であることが判明した。

竪穴住居跡の多くは東北、北陸地方の縄文時代前期から中期中葉にかけての時期の遺跡に特徴的にみられる、長円形のプランをもつ住居跡である。この中には長径10mをこす「ロング・ハウス」もしくは「大型住居」と呼ばれるものが28軒ある。そしてこのうちの約半数にあたる9軒の住居跡が、やや南に張り出す台地の等高線に直交するかたちで配置されている。すなわち、この部分を見渡したときには、その中心に広場としての空間を作った放射状配列として観察される。さらに、3基検出された配石遺構のうち最も大きな1基が、この広場の中央部にある。その他の住居跡はこの9軒

の放射状配列の住居群を境として、その北東側と南西側に分かれ、大小入り交じって重複しながら群在する。このうち、南西側住居群のうち一軒の住居跡では、住居が廃絶された様々な不要物の捨場とされており、多量の遺物が出土した。また、調査区の南西側の斜面には大規模な捨場が形成されており、本遺跡で出土した多量の遺物の大半はこの区域からの出土による。

土壌の分布は、調査区の西半分、ことに南西端に密集している。土壌の中には貯蔵穴と目される断面形がフラスコ状を呈するもの、また陥し穴とされるTピットも含まれている。

出土した遺物は多岐にわたるが、東北地方の縄文時代前期中葉～後葉の代表的な大木4・5式土器、および円筒下層b式、同c式土器が多量に出土している。土器の他には、玦状耳飾りや男根状石製品などの石製装身具や呪術性を帯びた製品が多い。また従来極めて稀にしか出土例のなかった2種の石製品が、本遺跡でまとまった量の出土をみた。利器としての石器も石匙や槍先に用いたと思われる尖頭器など特徴的な器種が多く認められる。



上ノ山Ⅱ遺跡遺構分布図



縄文時代前期の大型住居跡

たての 館 野 I 遺 跡

事業名	東北横断自動車道建設事業	所在地	仙北郡協和町中淀川字千着館野184
調査期間	昭和61年9月12日～12月9日	事業関係機関	日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所
調査面積	4,900m ²	担当者	大野憲司・栗沢光男

立地・検出された遺構と遺物

館野 I 遺跡は上ノ山 I 遺跡とちょうど対面する位置にあり、南北170m、東西120mの舌状台地上にある遺跡である。館野 I 遺跡は館野段丘上にある。

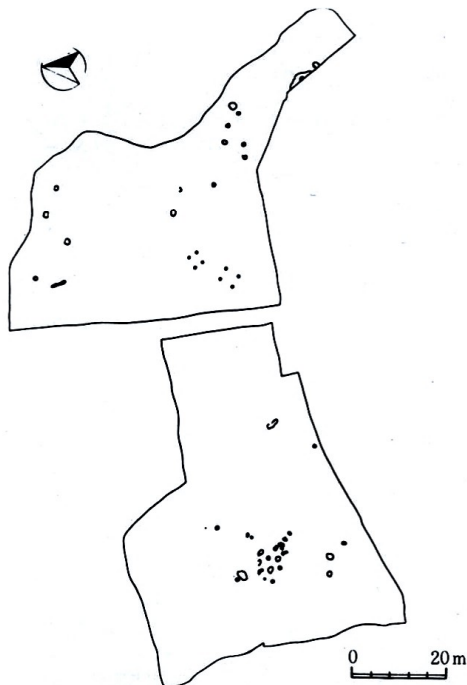
上ノ山 I 遺跡と館野 I 遺跡の間は比高10mほどの小さな沢筋があり、ちょうど両遺跡を分けるような形となっている。また館野 I 遺跡の北東の縁も同じく小さな沢筋によって画されているため、遺跡がの。台地は東側へL字形に突き出した形状を示す。今回調査範囲とされたのは、この舌状台地の北側の付け根部分にあたる。調査区での標高は45mを測る。調査区周辺は開田工事の際にかなりの削平をうけており、遺構の遺存状態は必ずしも良好とはいえない。

調査の結果、縄文時代前期の竪穴住居跡1軒、縄文時代中期の竪穴住居跡2軒、土坑32基、掘立柱建物跡2棟、焼土遺構1基などを検出した。

縄文時代前期の住居跡は調査区の西側で数基の土坑とともに検出された。壁面の立ち上がりははっきりとは確認できず、全体のプランは柱穴の配置によって把握した。縄文時代中期の住居跡は調査区の東側で検出している。しかし、これもその大

半が調査区外にあり、その全容はあきらかにしていない。この他、調査区中央部で検出された掘立柱建物跡とした遺構も壁面の失われた竪穴住居跡である可能性がある。土坑は平面形が円形もしくは楕円形を呈するものが30基、フラスコ状土坑が1基、Tピット1基である。遺物を出土しない例もあり、すべてについてその時期を明確にはできないが、周囲の出土遺物から縄文時代のものと判断できるものが多い。出土遺物としては、縄文時代前期の円筒下層式土器と中期の大木式土器、及び晩期の土器片が採取されている。これらの土器に伴って石鏃、石槍、石匙、半円状偏平打製石器などが出土している。

今回調査された部分は地形的にみれば遺跡の外殻の一部にあたり、館野 I 遺跡を構成する住居跡群などの遺構の集中する区域は、今回の調査区よりも南東によった台地の縁辺に近い箇所が想定される。しかし、今回の調査区でも上ノ山 II 遺跡と共通する時期の遺構、遺物が検出されており、いずれ上ノ山 I 遺跡とならんで、上ノ山 II 遺跡を核とした有機的な結び付きをもつ遺跡であろうことが推察される。



館野遺跡遺構分布図



縄文時代の住居跡（柱穴群）

はん せん 遺 跡

事業名	東北横断自動車道建設事業	所在地	仙北郡協和町峰吉川字半仙48
調査期間	昭和61年9月20日～11月19日	事業関係機関	日本道路公団仙台建設局秋田工事事務所
調査面積	2,300m ²	担当者	熊谷太郎・柴田陽一郎

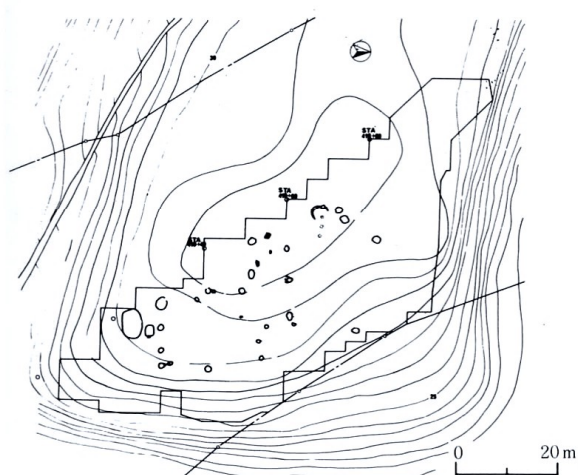
立地・検出された遺構と遺物

遺跡は国鉄峰吉川駅南西約1kmの地点にある。仙北平野を抜け出る雄物川は遺跡付近では蛇行しながら西流し、その左岸には比較的広範囲な沖積地が形成されている。対して右岸は淀川丘陵と呼ばれる標高100～140mの丘陵がごくわずかな中位段丘をのこして、ほぼ河岸まで迫っている。半仙遺跡はこの淀川丘陵と雄物川とにはさまれた中位段丘面が開析されてできた、東西約100m、南北約60mの舌状台地上に存在する。調査区が設けられたあたりでの標高は30～32mであり、現在県道強首・峰吉川線が通る河岸の沖積面との比高差は15mほどある。今年度は60mに設定された路線幅のうち北西側半分を調査した。

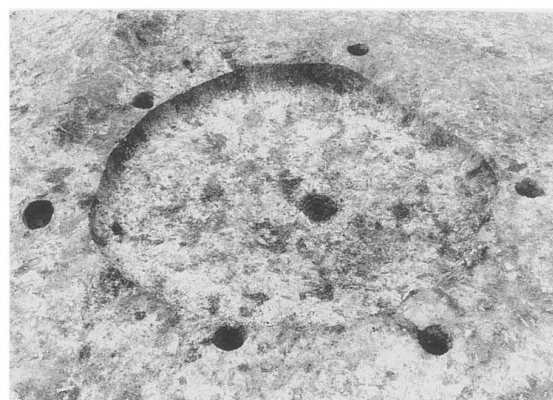
調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡3軒、土坑16基、土器埋設遺構1基などを検出した。縄文時代の竪穴住居跡3軒のうち2軒は、遺跡がのる台地の先端部、調査区の南側にあり、S I 20とした住

居跡は長方形の平面プランをもつ。また他の1軒は調査区の北西側で検出した。これらの竪穴住居跡は3軒とも周辺の出土遺物から推して、縄文時代前期～中期に属すると判断される。16基検出された土坑には形態的に特徴ある2種の土坑がある。この2者とも平面プランは円形を呈するが、一つは開口部径1.2～1.4m、深さ1.3～1.4mで断面形が円筒形をなし、底面に小ピットを持つもの。他は開口部径1.1～1.2m、深さ0.8m前後で断面形がフラスコ状または袋状を呈するものである。前者は調査区(台地)の中央部に2基、縁辺部に1基あり、後者は中央部に2基並んで検出されている。

遺物としては縄文時代前期、中期、後期の各時期を中心とした土器と半円状偏平打製石器、凹石、石槍、石鏃などの石器がある。また土器の中には縄文時代早期後葉に特有の表裏縄文の施文された破片が少量混じっている。したがって、この半仙遺跡の営まれた時期の上限は、早期後葉までさかのぼって考えることができる。



半仙遺跡遺構分布図



縄文時代中期後葉の竪穴住居跡

ほったさく
払田柵跡

事業名	払田柵跡学術調査	所在地	仙北郡仙北町払田・千畑町本道城回
調査期間	昭和61年4月1日～12月13日	事業関係機関	払田柵跡調査事務所
調査面積	1,300m ²	担当者	船木義勝

調査経緯・検出された遺構と遺物

昭和61年度は第65次～第67次の各調査が実施された。

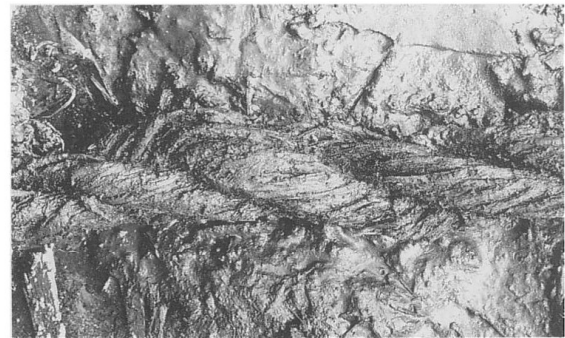
昭和59年度に実施された第55次調査に続く第65次調査は、4月1日から9月12日までおなはれ、前調査の平面的および層的な拡大を目的とし、現在進行中の環境整備事業が将来内郭南門まで及ぶ際の対応を予定して実施した。調査区は内郭南門の西部一帯の900m²の範囲である。調査の結果、払田柵創建期の盛土整地の範囲を確認し、さらにその下部から廃棄された古建材部材、原木、運搬用のロプ、木簡などを検出した。ことに植物のつるをよって作ったロプは、直径5cm、検出された部分の長さ5mと、古代のものとしては最大、最長の例となった。出土したのは、内郭南門の西約20mの地点の泥炭層中である。

第66次調査は昭和60年度の第62次調査に続く遺構確認調査である。ハンドボーリングによる遺構の確認、地山地形の把握が目的とし、4月23日～4月30日までと11月11日～12月13日までの2回にわけて実施された。対象となったのは外郭南部の409地点である。

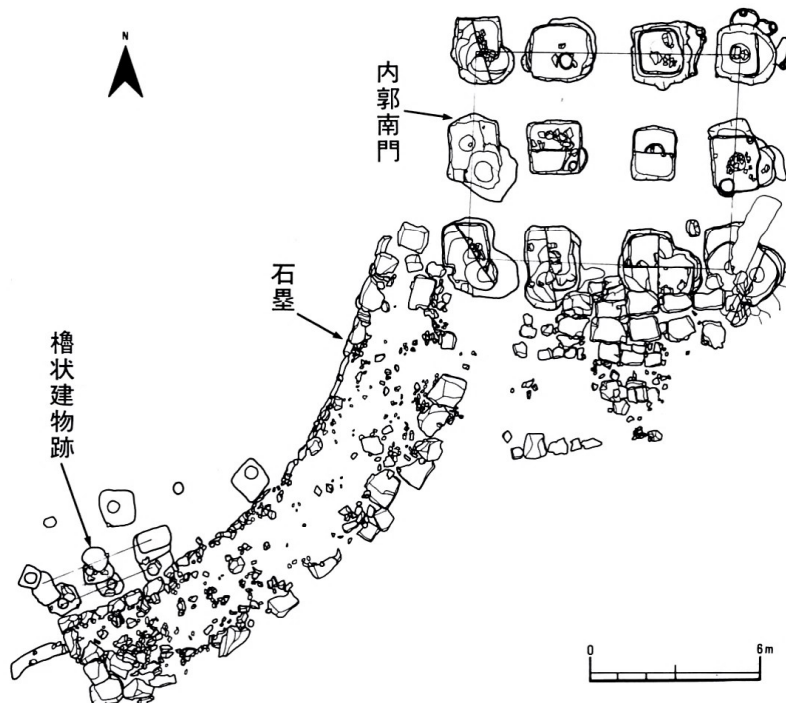
第67次調査は内郭西門の推定地で実施され、西

門跡および内郭線の西端を確認する目的で、400m²の面積を9月13日～11月10日までの期間、調査した。調査地には2箇所が選定され、このうち1箇所については3本のトレンチを設定して行なわれた。調査の結果、内郭西門を確認することはできなかったが、溝と築地土堀による2期の内郭線の西端を確認した。

また、これら各次の調査とあわせて第61次調査の対象区での築地土堀の断面剥ぎ取りと、第65次調査で確認された石塁の気球からの空中写真測量が行なわれた。



泥炭層中出土のロプ



内郭南門石塁平面図

3. 遺構の切り取り保存について

保 存 部

当埋蔵文化材センター保存部の活動として、今年度、堪忍沢遺跡で検出された13基の製鉄炉のうち、S N01とS N12の2基が遺跡から切り取られ、保存されることとなった。発掘調査現場での作業は7月17日から行なわれ、7月25日まで実施された。現場での切り取り作業について以下に日誌から抜粋してまとめる。

7月17日

製鉄炉表面の硬化のために、サンコールS K50の噴霧を開始する。サンコールS K50はサンコール・シンナーで10%溶液をつくり、ポリプロピレン製のスプレーによって噴霧する。S N01 S N12とも500mlずつ、午前10時と午後4時の2回にわけて行う。ポリプロピレン製のスプレーは安価で入手しやすいが、手動であるため圧力が小さく目詰まりするのが難点といえる。実際の使用では、噴霧当初は樹脂液の霧の状態も良好であったが、時間の経過とともにノズル部分に樹脂が固着し、使用不能となった。そのため、度々シンナーで容器の洗浄をする必要があった。切り取りの行なわれる対象がある程度の大きさをもっている場合には、コンプレッサー付属の噴霧機を用いる必要があろうかとも思われる。

7月18日

両遺構とも同量・同濃度のサンコールS K50溶液を、前日に引き続き午前と午後の2回噴霧する。

7月19日

スプレーの噴霧に加え、刷毛にしみこませたサンコールS K50の10%溶液を塗布する(500ml1回)。

樹脂の噴霧、塗布にあたっては土の表面の硬化がその目的であるので、土以外の部分(石、遺物など)にはマスキングを施した方が良いように思われる。今回は、製鉄炉の湯口に用いられた河原石にそうした措置を施さなかったために、樹脂が石の表面に光沢のある膜を作る結果となった。マスキングに用いられる材料としては紙タオル、画仙紙などが考えられる。

7月21日

S N12については切り取りの範囲を水糸を張って設定する。その後ステンレス製の針金を

長さ5cm程に切って打ち込む。これは、切り取り後、遺構基盤の土を裏側から除去する際の目安のためであるが、ステンレス製の針金では腰が弱く思いどおりに打ち込むことができない。結局、最も打ち込みやすかったのは1寸釘である。しかしそれでも炉壁のガラス質に硬化した部分には効果がなく、結局炉の外周に20～30本程度の釘を打ち込んだに留まった。

切り取り範囲の設定後、遺構表面の保護のため画仙紙を20cm四方に切ったものを水に浸し、製鉄炉に貼り付けてゆく。平坦な箇所では比較的貼りやすいのであるが、炉壁の垂直部分や炉壁と炉底の屈曲部などでは水に浸した画仙紙では切れてしまい、うまく貼ることができない。また、一部炉壁がくずれおちて穴のあいた箇所があり、これなどは画仙紙を水につけ丸くしたものを詰めるようにした。部分的に紙タオルなど丈夫な素材を併用して表面を保護するようにした方が良いのかも知れない。S N12では画仙紙を2回3回と重ね張りすることで補った。

午後、設定した範囲を直方体となるよう掘りこむ。深さは最も深い炉の後背部で1m強ある。実際に切り離される高さは、炉の前庭部分で10cm、後背部分で70cmほどとなる。切り取りの梱包に用いる材料が幅90cmのコンパネ(厚さ10mmのベニヤ板)であるため、この大きさでやっと炉の上部が隠れる程度であった。

S K01についてはアラルダイトを用いて炉の湯口部分の石を接着し、さらにその後サンコーL S K50の10%溶液を1500ml塗布する。

7月22日

木材を加工して木枠をつくる。準備した材料はコンパネ、4.5cm角の杉材、羽子板ボルトである。今回の製鉄炉のような規模の小さいものではこうした材料で充分であるが、より大きな対象について行う場合にはその量、種類とともに材質の選定にも考慮する必要がある。特に支えとなる枠をつくるための角材は材質、太さともに変えなければならないかと思われた。

S N12については切り取る直方体全体を100×110×90cmの大きさに削って仕上げする。その後、底の部分に木枠をセットするときの台となる根太材を入れるため、穴を2箇所穿孔する。このとき、穴の上面は切り取りを行う部分の底面にあたり、根太材と木枠およびこの底面の間に鉄板が押し込まれてゆくことになるので、この上面をできるだけ水平に掘り抜く必要がある。今回は掘り抜きの箇所のレベルを水準で合わせて作業を行った。

7月23日

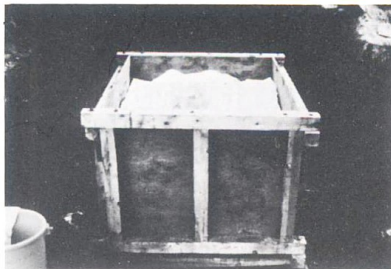
S N12は根太材を入れ、側壁に木枠を設置する。木枠のサイズが削り出した部分よりもやや小さく、設置にあたって再度削り込む。また表面に張り付けた画仙紙も乾燥したため剥が

遺構表面硬化のための
サンコール S K 50
(10%溶液) の噴霧
【S N12製鉄炉】



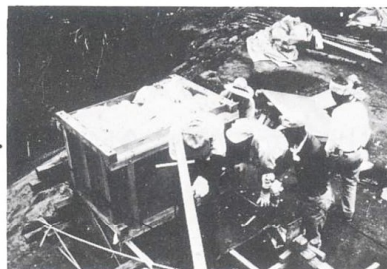
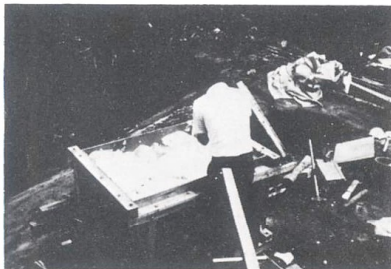
遺構表面保護のため
画仙紙を水張りする
【S N12製鉄炉】

木枠を設置しおえた
状態
【S N12製鉄炉】



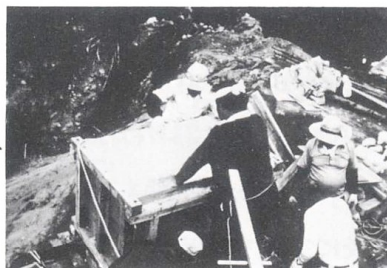
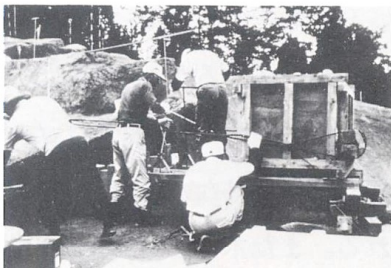
遺構周囲をほりこむ
【S N01】

ウレタン樹脂の注入
【S N01製鉄炉】



ウレタン樹脂を注入
しおえた状態
【S N01製鉄炉】

ジャッキによって
切り離す
【S N01製鉄炉】



盛り上がった樹脂
を削る
【S N01製鉄炉】

使用した薬品は以下のとおりである。

表面硬化用 サンコール S K 50

サンコール・シンナー

補修用材 アラルダイト G Y 1252 J P

アラルダイト・ハードナー H Y 837

発泡ウレタン樹脂 東洋ゴム製ソフラン S、R 両液(今回の切り取りには 2 遺構
あわせて各液 20kg 入れ 1 罐ずつ費やした)

以上の薬品は大阪・三恒商事から取り寄せている。

遺 構 の 切 り 取 り 保 存

れる箇所があり、これについても貼り直す。

午後、鉄板の押し込みを開始する。鉄板は差し込まれる方の辺を両刃に加工してあるものを用いた。鉄板の押し込みには自動車に使われているジャッキ2台を、押し込む側と反対方向にセットし、徐々に押し込む方法を採用した。ジャッキは本来垂直方向に押し上げるための器具であるので、水平に用いるためにはその固定の仕方が問題となる。現場では、すこしずつジャッキの根元に角材を継ぎ足していったが、やはりかなり不安定であった。また、ジャッキで押し込むのと反対の方向からの支えが必要であったが、S N01で行った際にはジャッキで押し込むのと同時に、梱包された木枠に太さ12mmのワイヤーロープをまわし、ルーパー（ワイヤーの牽引に用いる器具）を使って手前に引く力をかけておくという方法を用いた。この方法は単に支えを入れるのとは違い、鉄板の押し込みも容易であり有効に働いた。

S N12の鉄板の押し込みは木枠内に発泡硬質ウレタンを注ぎ込む前に行ってしまったため、鉄板を押し込む際の振動で炉の本体に幅1cm程のひび割れを生じるという事故にあった。ジャッキでの鉄板挿入というかなり慎重な作業方法であっても枠内の遺構が固定されていないと、ごくわずかな振動でも土にひびが入ってしまう。ウレタン樹脂による固定は必ず遺構の切り離し前に行わなければならない。今回は、ウレタン樹脂注入前にアラルダイトをひびのすき間に入れ、同質の土を埋め込んで修復している。

7月24日、7月25日

ウレタン樹脂の注入はS N12については24日、S N01については25日に行っている。

発泡硬質ウレタンはS液、R液の両方を同量ずつ混ぜて作るが、気温により発泡状態が異なる。S N12について行った24日は小雨が降り、気温も幾分低目であったため発泡するのに要する時間が長く、またその状態も充分満足のゆくものではなかった。発泡ウレタンの節減をはかり、ポリ袋に空気を詰めて木枠の中に入れる。また木枠と遺構本体の間にできた部分的なすき間にもできるだけウレタン樹脂を充填する。25日は天気も良く、気温も高かったせいかウレタンの発泡状態は良好であった。ウレタン樹脂の硬化後、枠外に盛り上がった樹脂を削って水平にし、ふたをする。S N01についてはこの後切り離しの作業を行っている。

2つの切り離された製鉄炉は、その後バックホーを用いて遺跡の外へ搬出した。

以上の現場での作業を行うにあたって、鹿角市教育委員会から多方面での便宜をはかっていただいた。また千葉県流山市の中ノ坪遺跡の製鉄炉の切り取りを行なわれた穴沢義功氏、福島県立博物館の今津節生氏、藤原妃敏氏からは事前および現場での御教示をいただいた。記して謝意を表します。

4. 研修事業

当埋蔵文化財センターの研修事業としては、毎年市町村文化財関係職員を対象とした研修会と、一般県民を対象とした発掘調査報告会とが実施されてきている。昭和61年度はこの2つの事業に加えて、東北横断自動車道上ノ山Ⅱ遺跡の現地説明会も実施された。

(1)昭和61年度秋田県埋蔵文化財センター研修会

I)日 時 昭和61年7月30日(水)、31日(木)

II)会 場 東北横断自動車道秋田線

協和インターチェンジ予定地発掘調査現場(第1日目)

西仙北町町立農村生きがいセンター 第一研修室(第2日目)

III)参加者 市町村埋蔵文化財関係職員

IV)内 容 研修テーマ『発掘調査の方法とその実際』

第1日目

a、遺跡の確認

「横断道関係遺跡の調査について」……………大野 憲司

踏査による遺跡の確認(実習)

b、発掘調査の実際(実習)

第2日目

a、発掘調査を行うに当たっての準備……………加藤 進

b、県内における発掘調査とその成果(講演)……………岩見 誠夫

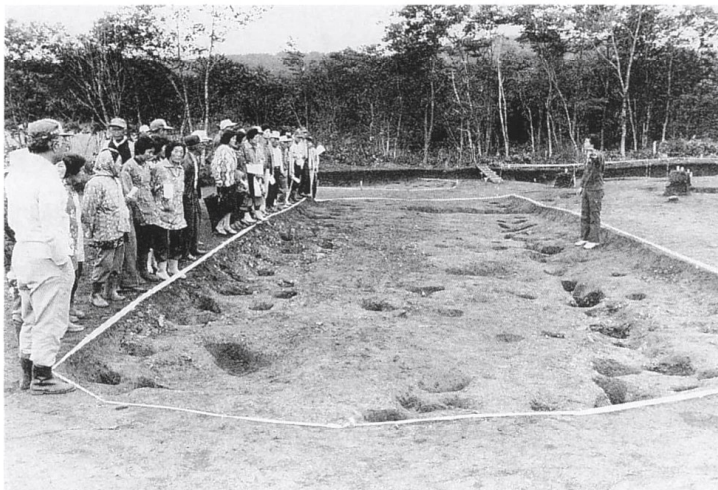
c、質問・自由討議

本年度実施された研修会は、昨年度までの考古学的専門知識の習得に加え、実際の遺跡に臨む際の知識や発掘調査現場での技術、さらには発掘調査を実施する際の事前準備など、実際の埋蔵文化財発掘調査事業への理解を深める目的で行なわれた。

第1日目には実習として2つの項目が掲げられ、遺跡と目される地点を踏査しての地形把握、遺物の表面採集による遺跡確認の方法を体験学習し、発掘調査現場での遺構調査の進め方についても上ノ山Ⅱ遺跡の遺構の調査を通じて学習した。第2日目には市町村自治体が主体となって発掘調査を遂行する場合に必要な事務的な手続きや、予算作成などについての講義が行なわれ、最後に秋田県での発掘調査の歴史についての講演がスライドを用いて行なわれた。

東北横断自動車道 上ノ山Ⅱ遺跡現地説明会から

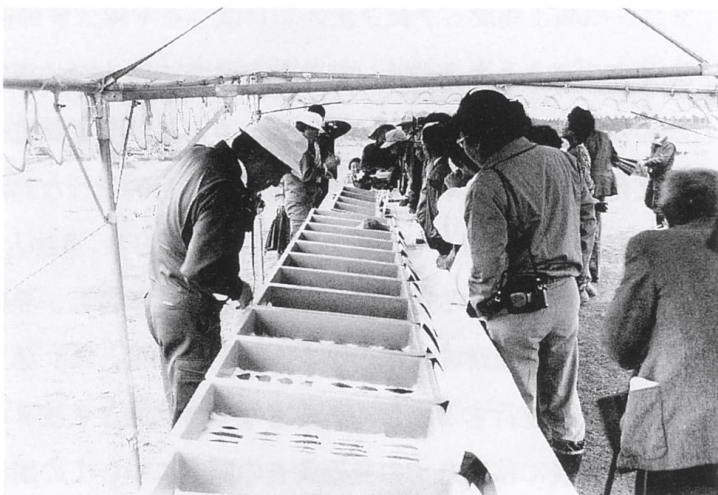
大型住居跡について説明。当日は 200人の参会者がグループに分かれて説明会場を巡回しました。写真では大型住居跡の縁に立って調査員の説明を受けています。この住居跡は、20人から30人が一列に並んで立てる程の長さがあります。



遺物の捨て場についての説明。台地の南西斜面での土器や石器の捨て場についての説明を受けました。復元される以前の土器が、押しつぶされた状態で重なって出土している様子が、この捨て場ではよく観察されました。



出土遺物の展示。膨大な数に上る石器のうち、特にその特徴が良くわかるものが、プラスチック製のコンテナに分類されてテント内に展示されました。各種類毎の石器にはその形の特徴や使用方法などについて簡単な説明書きが添えられています。



(2)東北横断自動車道秋田線上ノ山Ⅱ遺跡現地説明会

- I)日 時 昭和61年10月25日(土)午後2時～4時
- II)主 催 秋田県埋蔵文化財センター
- III)会 場 協和町上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査現場
- IV)対 象 一般県民

東北横断自動車道協和インターチェンジ予定地の埋蔵文化財の発掘調査がその大半の行程を終え、その成果を県民に発表できる時期となったため、大型住居跡からなる集落跡、大量の出土遺物が検出された上ノ山Ⅱ遺跡を中心としての現地説明会が実施された。説明会当日は、現地協和町をはじめ、広く県内外から200名を超える参加者があり、説明会は盛会裡に終了した。

(3)昭和61年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会

- I)日 時 昭和61年3月15日(日)午前10時～午後3時
- II)主 催 秋田県教育委員会
- III)会 場 秋田市文化会館5階大会議室
- IV)対 象 中学生以上の一般県民
- V)報告遺跡

<県関係>

上ノ山Ⅱ遺跡……………大野憲司
寒川Ⅰ,Ⅱ遺跡……………小林克・利部修
堪忍沢遺跡……………熊谷太郎
払田柵跡……………船木義勝

<市町村関係>

地方遺跡……………石郷岡誠一
西中海老沢遺跡……………桜田隆・鈴木初男
柏原古墳群……………鈴木俊雄

秋田県埋蔵文化財センター職員録

(昭和62年3月現在)

所 長	齊 藤 養治郎
副 所 長	岩 見 誠 夫
主 査	加 藤 進
主 事	高 橋 忠太郎
学 芸 主事	船 木 義 勝
学 芸 主事	大 野 憲 司
学 芸 主事	熊 谷 太 郎
学 芸 主事	谷 地 薫
文化財主任	桜 田 隆
文化財主事	柴 田 陽一郎
文化財主事	児 玉 準
文化財主事	高 橋 忠 彦
文化財主事	栗 沢 光 男
文化財主事	山 崎 文 幸
文化財主事	小 林 克
非常勤職員	田 村 政 也
(講 師	利 部 修)
(講 師	高 橋 学)

秋田県埋蔵文化財センター年報 5
(昭和61年度)

昭和62年 3 月31日発行

発 行

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話 0187-69-3331

印 刷

秋田マイクロ写真印刷(株)

秋 田 市 寺 内 字 蛭 根 85 - 69

電話 0188-23-7161